現代日本の占いの分類と機能

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 弓子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18158

教養デザイン研究論集
第９号　2016. 2

現代日本の占いの分類と機能

Classification and Function of the Divination of modern Japan

博士後期課程　教養デザイン専攻　2013年度入学
上　　田　　弓　　子
UEDA Yumiko

【論文要旨】
今日，占いは身近でなじみのあるものとして，広く消費されている。市場規模は一兆円とも言われ，とりわけ女性たちの関心は大きい。しかし，その関心や需要に，占い自体の信憑性や信頼度が関係しているとは限らない。「占いは信じないが占い情報は受容する」という傾向は進行しており，その現象を読み解くためにも未整理なままの諸占法を精査する必要がある。本稿では，「占い」の語義的定義を確認した上で，現代日本において認知される基本的な占法の分類を行った。「命学・卜学・相学・その他」による分類，「解釈の対象」による分類，「しるし」による分類を複合的に重ねたことで，各占法の機能的な違いも明確になる。加えて，福田（2007）により提示された占いの機能の６パターンである「①娯楽機能，②コミュニケーション・ツール機能，③性格を把握する機能，④精神安定機能，⑤行動指針機能，⑥気休め機能」について検討した。その結果，古来より呪術的であった占いがやがて解釈的な行為へと変容し，今日では心理的な実践文化として消費されていることが明らかになった。以上のような認識に基づいて占いの価値や意義を探求していくことが，今後の研究にとって重要である。

【キーワード】　占い，占い本，「命・卜・相」，占いの分類，占いの機能

はじめに

今日，占いは多くの人々に親しまれ，広く一般になじみのあるものとなっている。新聞やテレビ番組で「今日の運勢」を目にする機会は多い。また，ネットの占いポータルサイト上には，総数を完全に網羅するのが難しいほど豊富なコンテンツが展開されている。本屋の棚の一角には必ず「占い」コーナーが設けられ，自分で運命を占ってみたい人は，各種の占法の解説本（以下，「占い本」と記する）で「自分がどのような運命に生まれたのか」を占うこともできる。

論文受付日　2015年９月25日　　大学院研究論集委員会承認日　2015年10月26日

これまで『AERA』（朝日新聞社）では，占いブームに関する特集が幾度か組まれた。「占いは女のビジネス　一兆円市場」（2003）[1] で，産業医科大学講師の種田博之は，「占い本，ゲーム機，グッズなどをあわせると，市場規模はざっと一兆円」とし，「『朝のテレビでチェックする程度』の人も，薄い関心度とはいえ生活のなかに占いは確実に組み込まれている。『商品のオマケにあるとうれしい』もまさに同じレベル，目線。潜在的な需要ははかりしれない」と述べる。

占いの商業的展開については，『スピリチュアル市場の研究』（有元，2011）[2] により詳しい。同書の「占い」関連のビジネスについてみると，「携帯サイト，ゲーム機器などでの占いゲーム」の利用体験度は31.1％，「占い関連書籍（占星術，風水，運気など）」は21.4％，「対面での「占い・相談・鑑定」」は18.5％である。これらの単価は順に733円，1,091円，3,924円で，価格が低く手軽な順に消費されていることになる。「携帯サイト，ゲーム機器などでの占いゲーム」や「占い関連書籍（占星術，風水，運気など）」は，自分一人でできる簡便さから消費しやすいと考えられるが，その一方で，「対面での「占い・相談・鑑定」」も18.5％とけっして少なくない。このことからも，消費者にとって占いビジネスの利用自体がさほどハードルが高くないものとなっていることがうかがえる。

占いに対してとりわけ女性たちが強い関心を寄せているというのは一般的な見方だろう。『an・an（アンアン）』（マガジンハウス）[3] や『CREA』（文藝春秋），『FRaU』（講談社）など女性向けのライフスタイル情報誌では，年に数回の占い特集が組まれており，それらが年中行事のように定着していることからも，女性読者の占いへのニーズが継続的に存在していることがわかる。

前出『AERA』誌の特集「占いニッポンどこへ行く」（2006）[4] では，「アエラ編集部が東京，神奈川，千葉，埼玉の１都３県に住む18歳以上の男女を対象にアンケートを実施したところ，600人近くが回答し，その約６割が「占いを信じる」と答えた。女性に限ると７割を超え，18～39歳の女性では75％近くになった」という。この記事では占いとそれ以外の自己分析的コンテンツを比べた信頼度合の差などは不明であるが，特に女性において前述の消費につながるような占いへの関心が強くあるのは明らかである。

ただし，こうした占い情報への関心およびそこから生じる需要と，占い自体の信憑性や信頼度が密接に関係しているかといえば，必ずしもそうではない。福田（2007）は1998年のNHK放送文化研究所の意識調査の結果を引き，「占いの信用度と占い情報を取得する行為は必ずしも関連があるとは言えない。占い情報の取得行為が生起しない限り占いの信用度は生まれないが，占いの信用

---

[1] 福光恵『AERA 2003.11.3号』，12–17頁，16頁。

[2] 有元（2011），「図表 2–3 主なスピリチュアル・ビジネスの利用体験，利用頻度，単価（参考）」，54頁。

[3] 赤木（2007），11–13頁。によれば，『アンアン』は1969年にフランス『ELLE』誌と提携し，「新しい日本の女性誌」を目指して創刊された。テスト版『臨時創刊・平凡パンチ女性版』の最初の特集では，当時の他誌にはなかった星占いが取り上げられた。『アンアン』創刊号以降は，同執筆者により「エル・アストラダムスの星占い」が連載され，好評を博したという。

[4] 江間孝子/横田由美子『AERA 2006.2.27号』，46–52頁，47頁。

度が低い場合でも占い情報を取得している。」と分析する[5]。福田が挙げた『現代日本人の意識構造［第五版］』（1998年）のデータでは，宗教的行動として「この 1, 2 年の間に，おみくじを引いたり，易や占いをしてもらったことがある」は23％，「宗教とか信仰とかに関係すると思われることがらで，あなたが信じているものがありますか」の問いに対して「易や占い」との回答は 6％であった[6]。

この点について，最新版である同書『［第八版］』（2015）をみると，「この 1, 2 年の間に，おみくじを引いたり，易や占いをしてもらったことがある」は25％と上昇し，「宗教とか信仰とかに関係すると思われることがらで，あなたが信じているものがありますか」の「易や占い」という回答は 5％と下がっている[7]。つまり，占いは信じないが占い情報は受容するという傾向はより進行しているという結果であった。

このように，信頼度とは無関係に占いの人気は安定的であり，占い情報はつねに供給され，消費され続けている。にもかかわらず学術的な分野において，これまで占いは充分には考察の対象とは見なされなかった。占いが広く流通し続ける状況には何らかの社会的な機能が存在すると考えるのがふつうである。しかし，一般に占いといえば，非科学的なもの，あるいは迷信として語られることが多く，その信憑性を問う部分にばかり視線が向けられがちである。占いの理論には科学的根拠が乏しいというのは大方の見解であるが，それにもかかわらず，科学主義的な近代を迎えた今日もなお占いが多くの人々に受容される現象については注目すべきだろう。

この点を解き明かすためには，実際の占い情報や占いコンテンツの中身について精査していく必要がある。多くのメディアによって提供される占い情報の内容を具体的に読み込んでいかない限り，人々が占いに求めるものが何なのかも見えてこない。これまでこうした取り組みがなされなかった背景には，実践文化としての占いの基礎知識や占術的ロジックを全体的に把握・理解するのが容易でないこと，その結果，多種多様な手法の集積群として未整理となったままであることが要因の一つとして考えられる。数多い手法の中から占いの本質を探るのに最適なものを選び出し，考察を試みるというのは今後の課題である。それぞれ異なる展開を有する諸占法を理解した上で，そこ

---

5 福田（2007），130(3)頁。

6『現代日本人の意識構造［第五版］』(1998)，付録，20–21頁。同調査について，多少の解説を加える必要がある。1995年にはオウム真理教事件が起こっており，この頃の精神世界やオカルト，宗教に関して，一般の人々の見方が特殊なものとなった可能性がある。同書では「このオウム真理教事件がもたらした衝撃が，人々の信仰や信心に与えた影響をみるのが，九八年調査結果の一つの焦点であろう」(130頁）とし，「注目すべきは，「宗教とか信仰とかに関係していると思われることがらは，何も信じていない」という人が，突然，今回の調査で増えたことである」(131頁）と述べている。そして，「九〇年代後半，すべての年層で「信仰・信心」が急減したのは，オウム真理教事件によってもたらされた一種の宗教アレルギーによる可能性が高い。（中略）その影響が〈お守り・おふだの力〉〈あの世〉のほか，〈神〉や〈仏〉にも及ぶ範囲の広さであった。」(136頁）と解説する。ただし，信じているものとしての〈奇跡〉〈易・占い〉は，逆に増加傾向にあることが示された。

7『現代日本人の意識構造［第八版］』(2015)，付録Ⅰ，20–21頁。

に共通する本質的な価値や意義を導き出すためには段階的な作業が必要となる。

なぜ，占いの人気は廃れないのか。どんな部分が人々に求められているのか。占いへの需要には，人々がもつ人生へのいかなる希求が反映しているのか。筆者の研究の目的はそれらを探ることにあるが，本稿ではその前段として「占いとは何か」の一般的な定義，そして分類と機能を中心に，占いに関する諸相を整理する。曖昧な概念のまま扱われがちな占いについて，その中身をわずかずつでも明らかにし，今後の占いについての研究を一歩前進させることを目的としたい。

Ⅰ．「占い」の語義

世界各地で，また時代を越えて「占い」は存在するが，もともと「占い」とはどんなものを指していうのだろう。一般の概念として，占いはどのように定義されているのだろうか。本来的な語義について確認しておく。

一般的定義として『広辞苑　第六版』では，「うらない【占い・卜】」は，「うらなうこと。占象（うらかた）[8]によって神意を問い，未来の吉凶を判断・予想すること。またそれを業とする人。」[9]とされる。日本の占いの歴史を紐解くならば，すでに弥生時代以降から多種多様な占いが行われていた。『古事記』や『日本書紀』に登場する太占（ふとまに）に関しては，この占いに使用された獣骨や亀甲が，昭和二十年以降に発見され始めた。太占は，鹿の肩甲骨や加工した亀甲を灼いて，そこに生じた亀裂の形状を神意として吉凶を占う方法である[10]。このように古来の占いは神意を問うための手段であり，宗教的な儀式であったと考えられている。

では，宗教学において，占いはどのように定義されているのか。『世界宗教事典』（1999）で「占い」（divination）についてみると，「通常の探求法では獲得不可能な情報（未来・喪失物・潜在的形質特徴などについての）を知るために，呪的手段を用いること。占いはあらゆる社会に存在し，宗教の保護下にある場合が多い（たとえばデルポイの神託，チベットの神託）が時として宗教外部に，また宗教と対立するものとして存在することもある（たとえばキリスト教は一般に占いに対立する）。」とされる[11]。このような「呪的手段」としては，アフリカのザンデの毒による託宣[12]，イファの託宣[13]があげられている。同書では，他に古代近東では「占いは最高の科学と考えられて

8『広辞苑　第六版』（2008），280頁の「占象（うらかた）」の解説では，「うらかた【占形・卜兆・占象】うらないの結果現れたかたち。亀卜（かめのうら）・太占（ふとまに）に現れた縦横の亀裂。」とされる。

9 同上，281頁。

10 神澤勇一「古代の占い」『占いとまじない』（1991），12–19頁，12頁。

11 G. リンドブ「［ⅩⅣ］呪術とオカルト」『世界宗教事典』（1999），63頁。

12 Dr. A. ヘイスティングス「［Ⅰ］アフリカの宗教」『世界宗教事典』（1999），174–175頁によれば，ザイール最北部とスーダン南西部に居住するアザンデ（＝民族の意，ザンデは形容詞）では，妖術師の行為を看破する目的で毒を使う託宣（鳥にベンゲと呼ばれるものを与えてみる）を行うという。

13 同上，46頁によれば，イファはヨルバ（主にナイジェリア南西部に居住する西アフリカ最大の民族集団）の主要な占いの方法。16個のヤシの実や鎖を投げてできた256の形の一つ一つに，相当する数の詩歌が捧げられる。

いて，人間のあらゆる出来事の際に実際的な指針として採用された。予兆は戦いの前，個人的事柄の場合，あるいは神の怒りを測るために用いられた。予兆のテクストは政治的なあるいはその他の情報の貴重な源泉であった。」[14] とし，ここでは判断くじ，臓器占い，占星術などをあげている。このように，占いは世界中で儀式的に行われ，その象徴や現象から「実際的な指針」を得るために採用されたと定義されている。また，ローマでは，「人間の出来事に対する神々の態度を見分けるのに精密な方法があったが，そこには未来の予知はほとんどあるいはまったく含まれていなかった。鳥占いは戦争への参加といった特定の行動の選択について神々の同意を問う形式であった。」[15] と解説されている。

一方，日本で出版された『宗教学辞典』（1973）では，「占いとは，なんらかのしるしを手がかりにして，未来の出来事や過去・現在のかくされている事実，現在まさに為さんとする行動の是非などについての情報をうる方法で，しるしと情報の関係が，経験科学的にではなく，超自然的・神秘的に認識されていることに特徴がある。」とされる[16]。つまり，占いは人智的な判断では知り得ないことがらについて，超自然的・神秘的だと認識された方法によって情報を得ることである。ここでは，「しるし」と「超自然的・神秘的」がキーワードとなるだろう。同書では，「しるしとなるものは神秘的な力と関連づけられ，その力の源泉については，それら自体に力があるとされる場合と，それらの背後にあってそれらを介して情報を送る神秘的な実在者（神や霊ないし宇宙の理法）が考えられている場合とがある。占いは，前者の場合は，能動的ではないにしても，呪術的であり，後者の場合は，より宗教的色彩が濃い。いずれにしても，占いは当事者たちの宗教的世界観と密接な関係をもつ。」とある[17]。このように，日本においても本来の占いの語義は，呪術的，宗教的色彩が濃いものであったと考えられる。

しかし，最近の日本版『宗教の事典』（2012）では，占いについて異なる意味づけがある。同書では「未来もしくは過去の未知の事象を，特定の技術ないし知識を用いて解釈し，実践的な情報を得る方法，またその行為。日常生活で身近な占いのイメージは将来のことについて言い当てることだが，病気や不幸といった現状にいたった原因を探るためにも行われる。」[18] とされ，占いのロジックについては以下の解説が加えられる。「町なかの占い師の姿からは八卦見や四柱推命のように高度な技術や知識が連想されるが，俗信などの民間知識も占いを構成する。そして，占いによって得ようとする情報（例えば転職や結婚をいつ行うべきかの情報）と，占い行為そのもので扱われる事象（例えば筮竹やカード，天体の運行など）とは直接の因果関係がなく，それら異質な事象系列の間に恣意的な対応を見出すという点で，解釈行為がともなう。」[19] のである。

---

14 A. R. デイヴィッド「［Ⅶ］古代近東の宗教」『世界宗教事典』（1999），63-64頁。
15 Dr. J. A. ノース「［ⅩⅩⅨ］ローマの宗教」『世界宗教事典』（1999），64頁。
16 冨倉光雄『宗教学辞典』（1973），40頁。
17 同上，41頁。
18 川田牧人『宗教の事典』（2012），823頁。
19 同上。

前書では「占いは当事者たちの宗教的世界観」であるとされたが，後書では「異質な事象系列の間に恣意的な対応を見出す」，つまり，解釈的であるという要素が加わっている。「しるし」から何かの意味を見出すのが占いというのは共通しても，その時代的認識は，宗教観により支えられた儀式を指すものから人による解釈行為へと変わりつつある。かつて「宗教的世界観」に基づいて行われた占いが，今日では異なるものへと変容している可能性，あるいは占いが多様化することにより「宗教的な儀式」と「恣意的な解釈行為」の二側面を有するようになった可能性が考えられる。

Ⅱ.「占い」の分類

Ⅱ-1. 手法的な分類

つぎに，「占いとは何か」を考察するために，その手法による分類を整理する。占いには様々なものがあるが，実際にどんなものが占いに含まれ，それらがどのように分類されるかをみることで，占いが有する性質と共に機能的側面も明らかにできると思われる。

鈴木（1995）では，「命・卜・相」による占いの分類が紹介されている。これまでの慣習として，占いはその手法によって，大きく「命・卜・相」に分別されるといわれる[20]。そこに，スピリチュアリティとの関連性が強い「インスピレーションによる占い」や「霊感占い」系のものを加えれば，現存する占いに関しては概ね網羅できるといえよう。鈴木は，同論において宮家（1980）の論述を引き，「自然的―手段的」「客観的（非霊感的）―主観的（霊感的）」という分類の軸と，それによる「予兆・卜占・夢占い・巫術」という類型を紹介している。その上で，「占いの「技法」は多種多様であり，それを幾つかの類型に分けようとすれば，どうしても表面的な分類になってしまう。また「技法」というものは，言ってみれば占いの表の顔，外面であり，それだけに注目するのであれば，分類も一面的なものとなりかねない。」と述べている[21]。

しかし，「命・卜・相」という技法による分類方法は，現時点でもかなり有効と思われる。というのも，何を占うことができて，何を占うことができないかは，占いの機能を明らかにする上で重要なポイントとなり，それを決定するのはそれぞれの技法の基本システムの差異に他ならないからである。たとえば，「命学」は「生年月日」に基づいて占うものであり，生まれながらに備わった

---

[20] 「命・卜・相」に関しては，中国の五術という考え方に基づく。『五術占い全書』（1983），26-35頁では，一般にいう占いは「運命学」であり，発祥の地である中国ではそれを「五術」と呼ぶとする。運命学とは単に運命を占うのではなく，人間をよくするための術であり，「五術」とは「人間の幸福のために設計された五つの方術」である。この五術は「命・卜・相・医・山」であり，日本では「命・卜・相」の三術だけが運命学としてとり扱われ，「医」は医学，「山」は「仙道・宗教・武道」などの範疇に入れられたと解説されている。同書によれば，「命…人間の理解」，「卜…事態の予測と処置」，「相…物体の観察」となる。また，「医…病気の治療」であり，「山…人間の完成」であるが，「山」というのは，肉体と精神の修練によって「こころ」と「からだ」を強め，「人間の完成」を目ざす術法とされる。同書では中国由来の占いのみの解説がなされているが，この「命・卜・相」の三分類は一般化しており，日本の占いや西洋由来の占いについても用いられることが多い。

[21] 鈴木（1995），6頁。

生来的な要素によって占いが行なわれる。そこから導き出されるのは，個人の根本的な性質である。次の「卜学」は，筮竹を立てる八卦やタロット・カードなどで占った結果を運命の暗示として，そこから運命を読み解いていく。この手法によっては，質問者を取り巻く状況や状態が示されることになる。また，「相学」は，手相や人相，墓相や家相などのように，占断する対象の現時点での状態から未来の吉凶を判別するものを指す。このように，「命・卜・相」の手法の違いによって，自ずと占いが提供し得る情報の質も異なることになる。

ただし，この三つのうちの相学に関しては，占断後の対処法が重要な意味をもつ。年月を経れば相は変化し，その場合は，以前とは異なる占断結果が導き出されることになる。従って，相学では，人為的に相を変えることで運命が変わる可能性も示唆され，開運のためのアドバイスが積極的に行われることになるのである。たとえば，墓や家をリニューアルして改善したり，掌に吉相の手相線を書き加えたり，またメイクアップによって人相を変えて顔色を良くするなど，相学的判断に基づいた対策案の提供が占い行動の範疇にも入ってくる。こうしたニーズの発生は，「命学」や「卜学」にも無関係ではないだろう。個人の根本的な性質や質問者を取り巻く状況など，本来は固定的であるはずのものを占うための「命学」や「卜学」にも，「どうしたら運命は改善されるのか」という解決策が求められることになる。近代以前ならば，そのニーズに対処すべく呪術的，宗教的な考えに基づく加持祈祷や呪法などが講じられたと思われるが，今日では，個人の行動や意識を変えることによって運命を変えるという対策案が導き出されることになる。こうしたニーズの発生により，今日の占いには人生観の再構築，あるいは自己啓発に役立つ情報提供が期待されることになる。

また，宿命論的な考えに基づく「命学」と運命は人為的に操作可能だとする「相学」は一見矛盾するようにも思われるが，それらを包括して占いが成立するのは，人の運命を，本質的資質・外的要因・縁起・因果律などを全て総合したものだととらえる暗黙的前提が存在するためと考えられる。運命を総体的なものとすることで，運命には変えられる部分と変えられない部分があるという理解が生じ，そこに依拠する限りは諸占法の理論的な差異や矛盾も問われないことになるのである。

本来，占いにおける「運命」とは何かという議論は，何よりも重要なものである。もしも，古代のように，占いが，運命は決定的であり，自己の努力では未来に起こることは揺るぎなく避けられない，もしくは，神の意志として絶対であるという前提に基づくものであるならば，人生観の再構築や自己啓発による転換の可能性が生じる余地などあり得ないだろう。しかし，今日では，様々なテクノロジーの力により，変えられる部分についての人々の意識も変化している。出生時の性を転換したり，身体を再生し寿命を延ばしたりすることも可能となりつつある今，運命について語るのはそう簡単なことではない。本稿では深くとらえられる段階ではないため，改めて今後のテーマとしたい。

本稿では，ひとまず「命・卜・相」の三分類を基本とするが，後述の「Ⅱ-4．総合的な「占い」の分類」では，改めて「命・卜・相」の分類の内容についても精査していく。

Ⅱ-2. 解釈の対象による分類

占いの分類については，手法以外で区別するやり方も考えられる。前出の『宗教の事典』(2012年）に戻ると，解釈の対象によって分類がなされている。それは，「①自然に生起する事物，②夢や幻覚などの主観的経験，③人為的な操作をともなう特定の行為」の三種類である。①としては，「カラスが鳴いて人の死を知る」,「潮の満ち引きで子どもの誕生を予測する」といった形で民族意識にも広くみられるもの。これらは狭義の占いと区別して,「予兆」といわれることもある。また，②は「寺社の縁起などで語られるように，超越的存在がメッセージをもたらす場合に解釈の対象となり，これは「託宣」とよばれる」。③は占いとしてもっとも想定されやすく,「「まじない」の意味をもっともよく示しており，マジナウという行為をともなった広義の呪術と同義である。」とされる[22]。同書ではこれ以上の説明がないため，本稿においては，解釈の対象として，以下のように分類する。

①自然に生起する事物・動物の様子・予兆・自然現象の変異。

②夢・幻覚・託宣・個人的な神秘体験・超越的存在からのメッセージ。

③人為的な操作をともなうまじない行為・意図的に占断することによって得られた結果。

この分類では，①と②は人智を超えたものからの啓示を受け取るという受動的な占い行為であり，③は人が自ら求めて啓示を導き出す能動的な占い行為として考えることができる。

Ⅱ-3.「しるし」による分類

また，前出の『宗教学辞典』(1973）では，占いをしるしとなるものによって概観した上で，⑴人間をしるしとするもの，⑵自然をしるしとするもの，⑶道具を用いて人為的にしるしをうるものに大別している。⑴には，人間の動作行動および附属するもので，くしゃみ，しゃっくり，げっぷの類から縁起かつぎといわれるような言動，夢，神がかりの状態の霊媒の言動，変死した死体の状況，人体(全身，顔，頭，ひたい，眼，ホクロ，手，足，爪など)，生年月日と時間，姓名，筆跡，家相や祖先の墓相の方位，道辻や橋のたもとなど，戸外で見聞する他人の言葉や行動などが含まれる。⑵は，日月蝕や遊星の運動などの天文現象，雲・雷などの気象現象や地震，また鳥獣の行動や鳴声，動植物界における変異の発生，あるいは動物の内臓（とくに肝臓）の状況などである。そして⑶は占い杖（こっくりさん）式，くじ占い式，作卦，肩胛骨占い，毒物占いなどとしている[23]。同書では，そのほかに，犯罪や不貞行為の被疑者ないし告発者の手を熱した湯や油に入れさせて火傷をするかしないかによって罪の有無や主張の正・不正を判断するもの（神判，問罪法）も挙げられる。

本稿では，これらを以下に分類する。

⑴人間をしるしとするもの＝人や生活に関係するしるし。

---

22 川田牧人『宗教の事典』(2012)，823頁

23 冨倉光雄『宗教学辞典』(1973)，40-41頁。

⑵自然をしるしとするもの＝自然界の現象と動植物界における状況から読み取るしるし。

⑶道具や記号解釈を用いて人為的にしるしをうるもの＝占法によって得られたしるし。

⑷その他・神判・問罪法。

この「しるし」による分類は詳細かつ具体的である。上記「Ⅱ-2．解釈の対象による分類」と共通するように見えるが，しるしがどこに現れるかで細分化することにより，「Ⅱ-2．解釈の対象による分類」と異なる結果も生じる。「命・卜・相」の中にも，受動的な占い行為と能動的な占い行為が混在する場合があることがわかるのである。

また，同書では，「占いは，情報の受益者という観点から，私的個人的なものと公的社会的なものとに分けられる。」[24] とされ，これにより占いがどのような目的で行われるかも大別される。すなわち，私的個人的なものとは，「個人の運命の予知，あるいは局面打開の手段の選択または選択された手段にまつわる心理的不安の除去という役割」[25] などを果たし，公的社会的なものは，「古代社会や未開社会におけるように，社会の意思の統一を確保し，それによって逆に，占いを執行する階層の指導的地位や権力を保証する一助ともなる。」のである[26]。この分類は，占いの機能にも関与する。占い情報の価値や役割は，提供する側と受容する側，双方の動機や目的や立場によって大きく異なる可能性がある。自分自身に関する情報取集として行われるものと，他者や大衆に対して何らかの働きかけを意図して行われるものでは，たとえ手法や占断対象やしるしは同じであっても，そのメッセージの解釈は全く別物に展開され得る。もしも占いで神意を知ることができると見なされた施政者ならば，占いによって大きな権力を保持し，恣意的に施政（まつりごと）を操作することも可能になり得るのである[27]。

とはいえ，前述のように今日の占いは宗教的なものから，人為的な解釈行為へと変容しつつある。また，占い情報の受容者も特権階級から広く一般へと移行している。科学主義的な今日では占いの信憑性は低いとされ，なかでも神託的な占い情報についてはその価値や影響力はさほど大きくないと考えられる。本稿では，私的個人を受益者として展開される占いを主な対象として考察していく。

---

[24] 同上，41頁。

[25] 同上。

[26] 同上。

[27] 小堀（2015），6 頁によれば，ローマでは既に王政期以前の伝承の時代以来，国家の方針を決める際に星座占い以外の卜占が用いられていたという。「古代地中海世界において，卜占とは神々の意志を知る手段であった」とされ，「市民団の守護神の意向を知ることは重要な国事行為であり，法令発布や宣戦布告，公共建築物の定礎といった具体的な国事行為の土台となったのは卜占であった」という。同論文では，キケロ（Cicero 紀元前106年-紀元前43年）の『卜占について』（‘‘De Divinatione’’）の部分を引き，「このような国事行為をなす卜占であったが，そのシステムを都合よく用いる人間の存在も伝わっているのは興味深い」としている。

Ⅱ-4．総合的な「占い」の分類

現代の日本では，さまざまな占いが存在しているが，本稿では，以上のような分類法を複合的に取り入れ，以下に占いの分類の整理を行った。まず，一般の人が入手可能な占い情報として，書店に流通している占い本や占いについて書かれた書籍資料を基に，「占い」として紹介された占術・占法を調べて可能な限り列挙した。占法抽出の資料として，『五術占い全書』（1983），『占いとまじない』（1991），『世界占術大事典』実業の日本社』（1991），露木（1993），『運勢大事典』（1996），藤巻（2001），『東洋占術の本』（2003），松村（2012）などを使用した。ここには，インターネットの WEB 上で展開される占いや独自に生み出されたオリジナル占術は含まない。元々どんな占法に基づくものかなど占いのロジックに関する説明がなされていないもの，手法，解釈の対象，占いに用いるしるしが不明なものは対象外とした。ここで抽出されたものは，現在流通する占いのすべてとはいえないが，一般書で紹介される基本的な「占い」である。その総数は86種類となった。下位に諸占法を含む場合もあるが，それぞれが確立した占いとして認知されているため，すべてを計数の対象とした。

まず，最初にこれらの諸占法を大きく「西洋系」のものと「東洋系」のものに分けた。実際には，この区分によって受容者の受け止め方が変わることはほとんどないと思われるが，今後の参考資料として挙げておく。

次に，「Ⅱ-1．手法的な分類」の「命・卜・相」とその他で，以下の四つに分類する。

⒜命学的な占い＝誕生時の星の運行などから，個人の根本的な性質や定められた運命を占うもの。

⒝卜学的な占い＝ある儀式的な行為を経て，得られた結果を運命の暗示とし，質問者を取り巻く状況や状態を占うもの。

⒞相学的な占い＝占断する対象の現時点での状態から，未来の吉凶を判別するもの。

⒟その他の占い＝以上の分類に含まれない占い。

その上で，「Ⅱ-2．解釈の対象による分類」により，「①自然に生起する事物・動物の様子・予兆・自然現象の変異，②夢・幻覚・託宣・個人的な神秘体験・超越的存在からのメッセージ，③人為的な操作をともなうまじない行為・意図的に占断することによって得られた結果」に分類する。

最後に，「Ⅱ-3．「しるし」による分類」により，「⑴人間をしるしとするもの＝人や生活に関係するしるし，⑵自然をしるしとするもの＝自然界の現象と動植物界における状況から読み取るしるし，⑶道具や記号解釈を用いて人為的にしるしをうるもの＝占法によって得られたしるし，⑷その他・神判・問罪法」の四種類に分類し，それを一覧にしたものを（表Ⅰ）とした。また，「命・卜・相・その他」，「西洋系と東洋系」，「①⑴～③⑷」のそれぞれを掛け合わせた一覧を，（表Ⅱ）（表Ⅲ）（表Ⅳ）として論文末に掲載した。

まず，「命・卜・相・その他」でみると，命学的な占いが最も多く39.5％である（西洋系は卜学が最多数，東洋系は命学が最多数であるが，全体では命学が最多数となる）。「命学的な占い」はすべてが〔③⑴〕の組み合わせである。つまり，「人為的な操作をともなうまじない行為として，意

表Ⅰ　占いの分類

	(A)命学的な占い	(B)卜学的な占い	(C)相学的な占い	(D)その他の占い
西洋系	西洋占星術〔③，(1)〕 └ホロスコープ・チャート・リーディング〔③(1)〕 └サビアン〔③(1)〕 └ハーモニクス〔③(1)〕 └ミッドポイント〔③(1)〕 └ヘリオセントリック〔③(1)〕 └12星座占い〔③(1)〕 ヌメロロジー・数秘術〔③(1)〕 └ピタゴラス数秘術〔③(1)〕 └ゲマトリア（カバラ数秘術）〔③(1)〕	鳥占〔①(2)〕 タロット・カード〔③(3)〕 └トート・タロット〔③(3)〕 └カモワン・タロット〔③(3)〕 トランプ占い〔③(3)〕 コーヒー占い〔③(3)〕 紅茶占い〔③(3)〕 ビブリオマンシー（書物占い）〔③(3)〕 サイコロ占い〔③(3)〕 花占い〔③(3)〕 コイン占い〔③(3)〕 ルーン占い〔③(3)〕 ダウジング〔③(3)〕 ホラリー占星術〔③(3)〕 水晶占い〔③(3)〕 ジオマンシー（土占い）〔③(3)〕	キロ式手相〔③(1)〕	夢占い〔②(1)〕
東洋系	インド占星術〔③(1)〕 インド数霊術〔③(1)〕 宿曜占い〔③(1)〕 └七曜占い〔③(1)〕 └オリエンタル占星術〔③(1)〕 九星気学〔③(1)〕 └方位占い〔③(1)〕 └傾斜法〔③(1)〕 └同会法〔③(1)〕 └四盤掛け〔③(1)〕 算命学〔③(1)〕 └0学占い〔③(1)〕 四柱推命（子平推命）〔③(1)〕 └六星占術〔③(1)〕 └動物占い〔③(1)〕 紫薇斗数〔③(1)〕 星平会海（七政星学・張果星宗）〔③(1)〕 暦占〔③(1)〕 └六曜（六輝）〔③(1)〕 血液型占い〔③(1)〕 命学的式占〔③(1)〕 └六壬命理〔③(1)〕 └太乙命理〔③(1)〕 └奇門命理〔③(1)〕	辻占〔③(1)〕 蝋燭占〔③(3)〕 線香占〔③(3)〕 太占（ふとまに）〔③(3)〕 粥占〔③(3)〕 御神籤（おみくじ）〔③(3)〕 占い杖（こっくりさん）〔③(3)〕 易占〔③(3)〕 └周易〔③(3)〕 └断易（五行易）〔③(3)〕 └梅花心易〔③(3)〕 卜学的式占〔③(3)〕 └（占卜）六壬神課〔③(3)〕※1 └（測局）太乙神数〔③(3)〕※1 └（選吉）奇門遁甲〔③(3)〕※1 測字法〔③(3)〕	顔相（人相）〔③(1)〕 掌中八宮法（手相）〔③(1)〕 指紋占い〔③(1)〕 足裏相〔③(1)〕 黒子占い〔③(1)〕 墓相〔③(1)〕 家相〔③(1)〕 字相（筆記占い）〔③(1)〕 剣相〔③(1)〕 印相〔③(1)〕 姓名判断〔③(1)〕 風水〔③(2)〕 墨色〔③(3)〕	神懸かり〔②(1)〕 夢占い〔②(1)〕 前世占い〔②(1)〕 霊障判じ・憑きもの判じ〔②(1)〕 神判・問罪法〔②(4)〕

注）1. 各占いに関して，内容が同一で名称が異なるものは除く。
2. ある占術に関連すると思われるものは下位に記したが，そこにはオリジナル解釈が加えられている場合がある。
3. 以上は，解説本などで紹介される一般的な占法であり，現存する占いのすべてを網羅するものではない。

※1『五術占い全書』では，「卜」をさらに「占卜」「選吉」「測局」に分類している。

（表Ⅱ）　占いの個数と割合１（西洋系・東洋系×命・卜・相・その他）

	西洋系		東洋系		全体	
種類	個数	割合（%）	個数	割合（%）	個数	割合（%）
命学	10	35.7	24	※ 41.4	34	※ 39.5
卜学	16	※ 57.1	16	27.6	32	37.2
相学	1	3.6	13	22.4	14	16.3
その他	1	3.6	5	8.6	6	7.0
	28		58		86	

（表Ⅲ）　占いの個数と割合２（西洋系・東洋系×〔①⑴〕〜〔③⑷〕）

	西洋系		東洋系		全体	
種類	個数	割合（%）	個数	割合（%）	個数	割合（%）
〔①⑴〕	0	—	0	—	0	—
〔①⑵〕	1	3.6	0	—	1	1.2
〔①⑶〕	0	—	0	—	0	—
〔①⑷〕	0	—	0	—	0	—
〔②⑴〕	1	3.6	4	6.9	5	5.8
〔②⑵〕	0	—	0	—	0	—
〔②⑶〕	0	—	0	—	0	—
〔②⑷〕	0	—	1	1.7	1	1.2
〔③⑴〕	11	39.3	36	—	47	※ 54.7
〔③⑵〕	0	—	1	1.7	1	1.2
〔③⑶〕	15	※ 53.6	16	※ 27.6	31	36.0
〔③⑷〕	0	—	0	—	0	—
	28		58		86	

※は各分類で最多の占法。

（表Ⅳ）　占いの個数と割合３（命・卜・相・その他×〔①⑴〕〜〔③⑷〕）

	Ⓐ命学的な占い		Ⓑ卜学的な占い		Ⓒ相学的な占い		Ⓓその他の占い		全体	
種類	個数	割合（%）	個数	割合（%）	個数	割合（%）	個数	割合（%）	個数	割合（%）
〔①⑴〕	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—
〔①⑵〕	0	—	1	3.1	0	—	0	—	1	1.2
〔①⑶〕	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—
〔①⑷〕	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—
〔②⑴〕	0	—	0	—	0	—	5	※ 83.3	5	5.8
〔②⑵〕	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—
〔②⑶〕	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—
〔②⑷〕	0	—	0	—	0	—	1	16.7	1	1.2
〔③⑴〕	34	※ 100.0	1	3.1	12	※ 85.7	0	—	47	※ 54.7
〔③⑵〕	0	—	0	—	1	7.1	0	—	1	1.2
〔③⑶〕	0	—	30	※ 93.8	1	7.1	0	—	31	37.2
〔③⑷〕	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—
	34		32		14		6		86	

※は各分類で最多の占法。

①自然に生起する事物，動物の様子，予兆，自然現象の変異。
②夢，幻覚，託宣，個人的な神秘体験，超越的存在からのメッセージ。
③人為的な操作をともなうまじない行為，意図的に占断することによって得られた結果。
⑴人間をしるしとするもの＝人や生活に関係するしるし。
⑵自然をしるしとするもの＝自然界の現象と動植物界における状況から読み取るしるし。
⑶道具や記号解釈を用いて人為的にしるしをうるもの＝占法によって得られたしるし。
⑷その他・神判・問罪法。

図的に占断することによって得られた結果であり，人や生活に関係するしるしを用いる占いであり，能動的な占い行為」が多くを占めている。

次に多いのは「卜学的な占い」の37.2％であるが，そこではほとんどが〔③⑶〕である。それらは「人為的な操作をともなうまじない行為として，意図的に占断することによって得られた結果であり，占法によって得られたしるしを用いる占いであり，能動的な占い行為」となる。

「相学的な占い」は，「風水」「墨色」を除くすべてが〔③⑴〕の組み合わせとなり，「命学」と同様に「人為的な操作をともなうまじない行為として，意図的に占断することによって得られた結果であり，人や生活に関係するしるしを用いる占いであり，能動的な占い行為」が多いことになる。

「その他の占い」は，「神判・問罪法」を除くすべてが〔②⑴〕の組み合わせであり，大半が「託宣や神秘体験であり，かつ人や生活に関係するしるしを用いる占いで，受動的な占い行為」となる。とはいえ，その数は５つにすぎない。（表Ⅲ）をみると①と②の受動的な占いは少なく，圧倒的に③の能動的な占いが多いことがわかる。

そして，「Ⅱ-2．解釈の対象による分類」の「①自然に生起する事物，動物の様子，予兆，自然現象の変異」に該当する占いは「鳥占」だけであった。また，「Ⅱ-3．「しるし」による分類」の「⑵自然をしるしとするもの＝自然界の現象と動植物界における状況から読み取るしるし」も，「鳥占」，「風水」の２種類となった。「風水」は一般に人気を博しているが，日本の市場においては手法的に一定のパターンが確立され，占法としてのバリエーションは乏しい。そのため，そこから派生する新占法は少ないといえる。また，日本でブームとなった風水とされる占いは，個人的なインテリアや服装の調整などが一般的であり，「①自然に生起する事物，動物の様子，予兆，自然現象の変異」に該当するとは言い難い現状がある。このようにみると，自然界からの啓示とされるものは，今日では「占い」としてイメージされるものの範疇には入りにくいかもしれない。

以上のように，複数の分類を重ねてみることで，それぞれの占法の特性を明らかにし区別することが可能となった。また，わずかではあるが，「命・卜・相・その他」の中にも，他の異なる分類の占法が混在していることもわかった。

そして，この表からは「命・卜・相・その他」本来のカテゴリーでは対応できない占断に対して異なる手法が生み出される可能性も見えてきた。たとえば，「卜学的な占い」に含まれるホラリー占星術は，もともとは「命学的な占い」の西洋占星術に属するものであるが，個人の出生時の天体配置図（ホロスコープ・チャート）は用いられず，相談者が質問した瞬間の天体配置によって占断が行われる。その手法はまるで易占で卦を立てるようなもので，たまたま得られた天体配置図を状況暗示の手がかりと見立てるのである。命学的な西洋占星術では，個人の出生データが不明な際，あるいは事態の予測が必要な際には，この卜学的な手法が用いられることになる。このように，「命・卜・相・その他」などの「技法」の性質上，欠けが生じがちな部分を補完するために新たな手法が生み出されることがわかる。市場ではおびただしい数の占法が多様なメディアによって展開されているが，同様の分類と整理を行うことで，それらが生じた流れも理解しやすくなるだろう。

Ⅲ.「占い」の機能

ここからは，実際的な占いの機能について考察していく。前出（注 5）の福田（2007）は，今日的な占いの役割や機能に言及した数少ない先行研究である。調査協力者との面接を行い，KJ 法を用いて発話内容を分析した結果，調査協力者の占いへの役割期待や機能についてまとめている[28]。この調査は NHK 文化研究所の調査において一番占いを信じる率が高い16歳から29歳までの男女 6 人に対して，質問紙以外にも実際の面談を行い，発話の聞き取りをして得られた結果とされる。ただし，この調査協力者には，「占いを信じますか ?」という問いに対して「占いを信じる」と答えた人（「占い信用群」とされる）と，「占いを信じない」と答えた人（「占い不信群」とされる）の両方が含まれている[29]。なお，以下に筆者注として，同論文と「表 1　質問紙結果一覧表」[30]，「表 2　占いへの役割期待と機能」[31] を照らし合わせ，発話が「占い信用群」である場合は（○），「占い不信群」は（×），そのいずれかが明記されていない場合は（△）と付記した。

また，この調査では「占いとはどのようなものを指すのか」や「どの占いを対象とするか」については明らかにされていない。福田の説明としては，「心理学や科学では占いを疑似科学として扱うことが多い。（中略）多くの文献においても占いは迷信や俗信として捉えられている（伊藤，1994, 1995; Jahoda. G, 1969）。」[32] とされる。その俗信とは「「科学的な検証を経ていないにも関わらず，ア・プリオリに信じられている知識・技術・因果観」と定義され（野村，1989），今のところ科学的な証明はなされておらず，非科学・疑似科学であるという立場から研究されている。」とするに留まる[33]。

従って，この調査は，占いの種類などは具体的に特定しないまま，占い情報受容者による自由な「占い」理解を前提にして行われたものである。「占い」とは具体的にどのようなものを指すかを問わないことにより，かえって現状としては曖昧なままの「占い」について，一般の共通認識や自由発想に基づく役割と機能があぶり出されたと言えるだろう。

この調査を通じて，福田は占いへの役割期待と機能を大きく「娯楽性，不確定性の低減，気休め」の三種類に分類し，その内容を「娯楽性＝①娯楽機能，②コミュニケーション・ツール機能」，「不確定性の低減＝③性格を把握する機能，④精神安定機能，⑤行動指針機能」，「気休め＝⑥気休め機能」という 6 つのカテゴリーに分けてまとめている。

---

[28] 福田（2007），127(6)-125(8)頁。

[29] 同上，129(4)-128(5)頁。

[30] 同上，128(5)頁。

[31] 同上，127(6)頁。

[32] 同上，132(1)頁。

[33] 同上。

Ⅲ-1．占いの役割期待と機能としての「娯楽性」

福田（2007）によれば，「占いの娯楽性」には，①娯楽機能，②コミュニケーション・ツール機能が含まれているとされる。［おもしろい（△）］（以下，［　］内は調査協力者の発話を記す），［楽しい（○）］，［友達と一緒に占いをした（△）］などの発話があり，遊びやエンターテインメントとして占いは利用されるという。また，娯楽性の一側面として，［（占いのランキングが）１位かどうか気になる（×）］など，調査協力者がランキング形式で提示される占いをゲームとして扱っている場面も示される。また［流行っていたから学校で。教室で友達みんなと占いをした（△）］など流行や話題性の観点から，他者とのコミュニケーションの一環として機能していることが明らかにされている。

これらの回答は占いが一種のゲームとしてとらえられている状況を示しているが，この場合，占いの内容が自分の決定的な運命を示すものだという世界観はほとんど反映されない。こうした娯楽的な占い代表としては，（表Ⅰ）の「12星座占い」が挙げられるだろう。現代の西洋占星術は「命学的な占い」として個人の根本的な性質を占うことが多いが，その中の「12星座占い」は出生時の太陽星座のみで占う簡便なものであり，テレビ番組の「今日の運勢」，雑誌での「今週の運勢」や「今月の運勢」など占い期間が限定される場面で目にすることが多い。人を12種類のパターンに分けて運勢判断できる便利さから，この手法は占いランキングでも取り上げられやすいものとなる。

この「娯楽性」に関しては，いずれの占いであっても対象となり得るが，結果を楽しんだり，コミュニケーション・ツールとして他者と比較して楽しんだりすることができる場合に限定される。つまり，占い提供者と対面で行われる鑑定や，自分で自分を占う一人占いは除かれ，また，「霊障判じ・憑きもの判じ」や「神判・問罪法」などの深刻なイメージや宗教性が濃く伴うものも該当しないと考えられる。このように，他人と気軽に情報を共有できる占いが「娯楽性」を満たすことから，「娯楽性」という機能の有無については，占いの手法やしるしではなく，占いの目的や動機，または第三者と共有できるか否かという占いの場面によって決定されるものと考えられる。

Ⅲ-2．占いの役割期待と機能としての「不確定性の低減」

つぎに，不確定性を低減する機能として，③性格を把握する機能，④精神安定機能，⑤行動指針機能について見る。これらはいずれも，占いが日常生活や人間関係に関する漠然としたものになんらかの納得した答えを導き出すために使用されることを示すとされる。③性格を把握する機能に関与する発話として，［自分を知りたい（△）］，［占いで他人の性格を知るのが目的（○）］，［自分で気付いていない自己を見つける（×）］などが挙げられるが，こうした自己認識に加えて，③性格を把握する機能には他者認識や相性も含まれるという。福田によれば，「他者認識についても同様に，自分の知らないもしくは曖昧な他者の情報を得るために占いが用いられ，他者の性格を把握する手段となっていた。」[34] とされ，「占い情報により自己や他者が認識しやすくなり，さらには性格

や個人を規定する要因となる可能性が見られた。」のである[35]。

③性格を把握する機能に関しては，（表A）では「命学的な占い」が対応するだろう。それらはいずれも，「誕生時の星の運行などから，個人の根本的な性質や定められた運命を占うもの」である。本論の（注20）のように，『五術占い全書』では「命…人間の理解」とされ，「命学的な占い」は③性格を把握する機能に合致するものと考えられる。

とはいえ，自己の性格を把握するのには，たとえば精神分析や心理テストのほうが適切である。身近で手軽であるという理由以外に占いが用いられる何らかの要因というものは考えられないだろうか。これに関しては，福田の調査対象者による，「自己を知る」ではなく［自己を見つける］という発話に何らかの手がかりが含まれるのではないかと思われるが，この点を保留として考察を進めたい。

次に，不確定性を低減する機能の④精神安定機能は，「何らかの不安や迷いを抑制し，安定を得ることを期待するもの」とされる。「自発的に占い情報に接し，何らかの問題に伴う不安や迷いを低減する手段として占いが機能している。」というのである[36]。ここでは，［（占いに）そう書かれているから，気持ち的に今日は大丈夫かなって。（○）］，［（占いに）言われたらそうかもって。で，安心したいんかな。（×）］という自己分析的な発話が挙げられている。また，調査協力者の例として，占い情報を取得した結果，［この人ではなく，次の人が運命の人である（△）］という情報から，［本当に自分はその人の事，好きやったんかな？違ったんちゃうかな（△）］と「失恋時のショックを次に現れる運命の人を想定する事で視点を変換させている。」というケースが挙げられる。これにより，「占い情報はネガティブな事象に対する感情をコントロールし，ポジティブな感情を喚起させるために意図的に受容されている。占い情報を受容することは，個人にとってネガティブに認識された対象・事象をポジティブな対象・思考に転換する手段となっていた。さらにラッキーアイテムを所持することで不安感に対処する者もいた。」という[37]。

本来の占いは神託として吉凶の結果が導き出されるものである。従って，どの占いにもポジティブな情報とネガティブな情報は共に含まれる。この調査では触れられていないが，たとえば内心不安に思っていたことを言い当てられて，かえって不安を感じるというケースも実際にはあるだろう。占いが上述のような機能を果たすためには，受容者にとって有益な，あるいは都合がいい展開につながるような情報や表現が含まれている必要がある。

この調査の結果では，あくまでも受容者が「何らかの不安や迷いを抑制し，安定を得ることを期待」しているわけである。また，「視点を変換させている」点からも，受容者の意識の働きが必要となる。占い情報は「意図的に受容」されており，「ネガティブに認識された対象・事象をポジテ

---

34 同上，126(7)頁。

35 同上。

36 同上。

37 同上。

ィブな対象・思考に転換する手段」である。この機能が成立するためには，受容者自身が占いを役立つものにしようとする目的的意識が不可欠となる。従って，④精神安定機能は，占いそのものに備わった機能というよりは，受容者によって期待され形成される機能であると考えられる。

さて，⑤行動指針機能については，「問題解決のための参考や未来予測として占いが機能していることを示す。占い情報は今後の行動選択や決定の手段として活用されていた。」[38] という。具体的な発話を見ると，占い不信群では［（占い師に言われたことは）アドバイス的に捉える（×）］や［後押ししてほしいだけ（×）］があり，占い信用群では［（占い情報から）悪い内容に関しては対応策を練る（○）］という発話がみられる。ここでは，「占い不信群は参考程度にしか扱わないが，信用群は情報をそのまま受け取る傾向がみられた」[39] のである。また，占いの信用度の高い者が［占いは未来を予知するものである（○）］と発話しており，積極的なラッキーアイテムの所持や運を好転させる行動の遂行がみられたという。福田は，「占い情報から今後（近い将来）経験するだろう体験を予期しておき，現実場面で対処する手段として作用すると考えられる。」と解説している[40]。

先の④精神安定機能についての発話では，占い信用群と占い不信群との間に大きな違いはないが，⑤行動指針機能については，占いを信じる人とそうでない人の場合は異なる結果となる。福田は，「占いをみる行為は「基本的に，なにがしかの情報（兆）を捉えて，未来の状況（果）を予測する行為」であり，「占いが自己の物語製造装置として作用することを述べた多くの文献と一致する（鈴木，2004；板橋，2004；芳賀，1994）。」[41] としているが，それは受容者の中でも占い信用群については合致する。占い不信群が占いを受容したとしても，参考程度にしか受けとめなければ，積極的に行動指針として採用する可能性は低いと思われる。この点については，（表Ⅰ）で一覧化した占いのいずれについても同様のことがいえる。「命・卜・相・その他」のいずれの占いも，その後の行動指針として機能し得るだろう。また，「夢占い」や霊視による「前世占い」なども，受容者が目に見えない世界からのメッセージとしてとらえるならば，そこから行動指針が導き出されることになる。ただし，「その他の占い」の「神判・問罪法」については，特定宗教などの組織内で行われる場合には例外となり得る。占いの目的が，その組織内での法秩序やルールによって裁きを行うことにあるためである。

このように，⑤行動指針機能については，占いの手法の別やしるしに基づくものではなく，受容者の意識によって発生するものといえる。そして，この機能の成立は，個々の受容者の占いの信用度によるところが大きい。また，占いの目的が裁きを行うことにある場合は，受容者の自由意志が働かないため，この機能は成立しないと考えられる。

---

38 同上，125(8)頁。

39 同上。

40 同上。

41 同上。

Ⅲ-3. 占いの役割期待と機能としての「気休め」

6カテゴリーの最後として，⑥気休め機能が挙げられる。この「気休め」は，「占い情報取得時の一時的な安心を指す。占いには不安や迷いを低減するだけではなく，満足感を与える機能がある。」[42] とあり，この機能は「占い情報に関係なく，占い情報を取得する行為そのもので得られる安心感を指す。」[43] という。［とりあえず（占いを）みたい（△）］という発話が多く，［いいことは信じる。悪いことは信じない。(×)］や［良い占い情報が得られるように占いを梯子する（1日に何種類か見る）(×)］との発話から，福田は「占い情報の正確性に関係なく，自分にとってポジティブなもの，もしくはポジティブに変換できるものだけを選択的に取り入れる姿勢がみられた。ポジティブな占い情報を積極的に受容し，情報取得時に発生するポジティブな感情を楽しむために占い情報を取得する行為が生起していた。」[44] と解説している。

また，［占いをみたらちょっと占いのせいにできる（○）］という発話から，「意識的なセルフ・サービングバイアス」[45]，つまり，「課題遂行などの結果を自己にとって好ましい意味を持つように，解釈，説明する傾向」[46] がみられることも指摘されている。［占いをみてたら悪いことが起こっても占いのせいにできるんやと思うわ（○）］という発話からは，「物事に対する失敗を課題の難しさや運といった外的要因に帰属させる傾向」[47] をみており，「調査協力者にとってネガティブな事象が生じた場合，ネガティブな占い情報を想起することは，「運が悪かったから，仕方がない」とネガティブな事象の発生原因を外部に帰属させる手段であった」[48] とされる。

以上について，考察してみたい。まず，「占い情報を取得する行為そのもので得られる安心感」というのは，占い情報の中に何かの形で精神的な不安を解消してくれるものが含まれているという期待により支えられるものであろう。また，「占いを梯子する」（一日に何種類か見る）という行為は，占いの情報量の豊富さや占い結果のバリエーションの多様さを期待して行われるものである。たとえば，寺社で御神籤を引いて「凶」が出た際に，「もう一度御神籤を引きたい」，あるいは「「吉」が出るまで何度も引きたい」と思う人はいるだろう。自分の気に入る答えが出るまで，占い情報を取得し続けたいという気持ちが起こるのはけっして珍しいことではない。つまり，占いの結果は決定的ではなく，むしろ占いによっては異なる答えが多数存在し，いろいろな可能性が提示されるという前提に基づいて，占い情報の収集が行われていると考えられる。そして，「占い情報の正確性に関係なく，自分にとってポジティブなもの，もしくはポジティブに変換できるものだけを

---

[42] 同上。

[43] 同上。

[44] 同上。

[45]『「教科書」社会心理学』(2000)，191頁によれば，セルフ・サービングバイアス（self-serving bias）とは，「自己の成功を能力のような内的要因に，自己の失敗を運のような外的要因に帰属させる傾向」である。

[46] 福田（2007），125(8)頁。

[47] 同上。

[48] 同上。

選択的に取り入れる姿勢」には，占いを積極的に取得して，自分にとって効果的な情報を選択的に取り入れようとする受容者の意図が強く働くことを示す。この機能に関しては，占いの受容者が自らの中でテクニカルに占い情報を処理しようとする意識が重要となる。

また，前述のように，占いが「ネガティブな事象の発生原因を外部に帰属させる手段」[49]となり得ることが示されたが，この意識的なセルフ・サービングバイアスとしての機能が「気休め」と呼ばれるべきものであろう[50]。これらの機能に関しては，④精神安定機能と同様に，「命・卜・相」のいずれの占いも該当し得るだろう。「その他の占い」についても，「神判・問罪法」以外のものであれば，占い手法を問わない複数の情報の取得によって成立する機能であると考えられる。

このように，運命として提示された占い情報の中から，満足できる情報を見出すために，また，失敗や悪いことの発生を運命のせいとして転換させるために，占いは用いられる場合がある。今日の占いに期待される機能として，こうした自己の心理を調整する役割が生じていることがわかる。

おわりに

一般に「占い」といえば未知の事柄を占う行為として一括りに見なされがちであるが，その中身は実に多様で多彩である。西洋由来のもの，東洋由来のもの。あるいは個人の性質を占うもの，現状を読み解くもの，未来の展開を占うもの，また，目に見えない何かからの働きかけやお告げ，運命好転のための方策など，様々な要素が「占い」の範疇に含まれている。その価値や意義について語られることの少ない占いだが，本稿で改めて分類・整理したことで，個々の占法に備わる機能的な部分が見えてきたのではないかと思う。

語義的定義で確認したように，もともと占いは宗教的な世界観に基づいて生まれ，運命は目に見えない超越者によってもたらされると考えられた。その真意を問うために，あるいは教えを請うための儀式として占いは存在したのである。自然のしるしよりそれを読み解こうとする技法は，やがて人間による解釈行為へと変わっていく。神のお告げを受動的に受けとめるだけではなく，能動的に未来を予知するためのテクノロジーとして，占いは用いられるようになった。そして，今日では，占いはより身近で日常的な存在へと変化している。

先の「Ⅲ-2．占いの役割期待と機能としての「不確定性の低減」」の「③性格を把握する機能」では，占い受容者の発語が「自己を知る」ではなく，［自己を見つける］であるという点に注目した。いずれの時代においても，占いで占われるべき対象は目には見えない事々である。いまや，目には見えないことというのが，神の意図や未来の運命ではなく「自己」となり，現代はそれを自らの手によって見つけなければならない時代なのかもしれない。

---

49 同上。

50 同上では，さらに，「物事に対する失敗を課題の難しさや運といった外的要因に帰属させる傾向を自己防衛バイアスと呼ぶ（藤島，2001)。」とし，「このような自己防衛の効果を期待した自発的な占い情報の収集が行われていた」としている。

人々は占いを娯楽やコミュニケーション・ツールとして楽しみ，性格を把握することで人間関係を促進し，ネガティブな事象に対する感情をコントロールしつつ精神の安定を図る。また，問題解決のための参考や未来予測として用いることで行動選択や決定を行う。そして，悪いことは運命という外的要因のせいにして，占いをセルフ・サービングバイアスとして用いるのである。そこには，いずれも占い情報を積極的に取得し，その中から自分に有益な活用法を見出そうとする受容者の心理的操作が働いている。かつて「当たるか，当たらないか」という視点で語られてきた占いは，今では取捨選択が可能な「自己に関する情報群」と見なされているのである。

これまで占いは，時代時代の宗教観や社会意識や流行文化を反映し，人々のニーズに寄り添うことで，葬り去られることなく存在してきた。今後もその展開や変容について注視すべきであろう。

以上のような認識に基づいて占いの価値や意義を探求していくことが，今後の研究にとって重要であると考えられる。

◆参考文献（発行年順）

小口偉一，堀一郎（監修）『宗教学辞典』東京大学出版会，1973年。
宮家準『NHK ブックス376　生活のなかの宗教』日本放送出版協会，1980年。
張耀文，佐藤六龍『五術占い全書』文研出版，1983年。
M. ローウェ/C. ブラッカー（著）島田裕巳（訳代表）『占いと神託』海鳴社，1984年。
ロジェ・カイヨワ（著）多田道太郎・塚崎幹夫（訳）『遊びと人間』講談社学術文庫，1990年。
『占いとまじない』「別冊太陽 no.73」平凡社，1991年。
日本占術協会（編）『世界占術大事典』実業の日本社，1991年。
露木まさひろ『占い師 !』社会思想社，1993年。
鈴木健太郎「占いの諸類型とその特質：現代日本の占い本を通して」『宗教と社会（創刊号）』「宗教と社会」学会，1995年，5–28頁。
矢島俯仰（編）『運勢大事典』国書刊行会，1996年。
NHK 放送文化研究所（編）『現代日本人の意識構造［第五版］』NHK ブックス，1998年。
ジョン・R・ヒネルズ（編）佐藤正英（監訳）『世界宗教事典』青土社，1999年。
小林裕，飛田操（編著）『「教科書」社会心理学』北大路書房，2000年。
藤巻一保『占いの宇宙誌』原書房，2001年。
『東洋占術の本』学研，2003年。
福光恵（ライター）『AERA 2003.11.3号』朝日新聞社，2003年。
江間孝子/横田由美子（ライター）『AERA 2006.2.27号』朝日新聞社，2006年。
赤木洋一『「アンアン」1970』平凡社新書，2007年。
福田茉莉「占い情報の受容と信用度の関連」岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要　第23号，132(1)–118(15)頁，2007年。
http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/11013（2015/04/20閲覧）
新村出（編）『広辞苑　第六版』岩波書店，2008年。
有元裕美子『スピリチュアル市場の研究』東洋経済新報社，2011年。
松村潔『精神世界の教科書』アールズ出版，2012年。
山折哲雄（監修）『宗教の事典』朝倉書店，2012年。
マギー・ハイド著，鏡リュウジ訳『ユングと占星術』青土社，2013年（邦訳初版1999年）。
NHK 放送文化研究所（編）『現代日本人の意識構造［第八版］』NHK ブックス，2015年。
小堀馨子「古代ローマにおける卜占」『地中海学会月報379』，地中海学会 Collegium Mediterranistarum, 2015年。